

## フランス

## 国立パリ政治学院便り

広瀬 充重

私が留学した国立パリ政治学院での授業は、学校の名前にも明らかなように政治や国際関係を中心に組まれていて、フランス語で授業を受けるだけで既に厳しいところにこの現実とあって、慣れるまでは呆然自失として講義に参加しているといった様態でした。しかしながら、日本と比べると授業数は少なく、1週間にフランス語は1回だけで、後は社会科学系の授業ばかりが4科目といったところでした。そういったわけですからあまり学校に行くことはないかと思いきや、何か1つの科目に宿題が出ると、もう意識の上では半強制的に学校の図書館で資料探しとコピーをしなければならなくなるのです。ですから現実には、図書館に通う方が教室に入る回数より多くなるということになっていました。

こうした事情から頻りに図書館に通っていましたが、国立パリ政治学院の図書館は、雰囲気に関しては勉強に向いていると言えます。というのも、学生の学ぶ姿勢が真摯であるため、若しくは宿題の多さによる焦りのためか誰も私語はしませんし、彼らの姿そのものが、二律背反的ではありますが、私にやる気を起こさせるからです。ある種の仲間・ライバル意識が存在したように覚えています。しかしながら使い勝手の良さに関しては、日本では当たり前を感じていることさえフランスでは、恐らくは他の国でも、ストレスを感じる程の遅さや不器用さを伴います。例えばですが、ある本を検索で探し出して司書官に閲覧をお願いするとします。すると直ぐに、「45分程してから取りに来てください」と言われるのが必定です。しかも本の種類によっては、翌日まで出庫して貰うのを待たなければなりません。国立パリ政治学院というエリート学校でよく、このような遅さが通じるものだと呆れてしまいました。また時には、

検索機では「貸出可」となっているにもかかわらず、実際に注文してみると既に借りられていたりします。どうやら、図書館情報の管理はまだ未熟であるようです。更には、これは1番憤ったこと



ですが、図書館に付設のコピー機が使い物になりません。現在日本で一般的に知られているものではなく、かつてのプリントゴッコを彷彿とさせる、「パシッ」とフラッシュで複写する方式なのです。のろのろとしている上に全体的に黒ずんで写りますし、巨大な図体のせいで多くは敷設出来ず、しばしば故障さえ起こし、そうした結果いつも長蛇の列が出来ていました。それに1人1人のコピー量が半端ではないのです。何冊も手に持って列を成しているのです。悲しくはありますが、これが学校の図書館で1番鮮明に残っているイメージです。

上記の憤慨から逃れようとして辿り着いたのが、13区にある国立フランソワ・ミッテラン図書館です。巨大な4つのビルを長方形の敷地の4隅に配し、中央には地階から吹き抜けのテラス付きの庭をあしらった、華の都の威信を代弁するような建築です。教会を想起させる高天井の閲覧室は、長大なテーブルと、座り心地が良い椅子と個人スタンドとで満たされ、静寂と威厳との中に全書籍が配架されています。書庫と閲覧室とが一体になっているため自分で手にとって調べる事が出来、学校の図書館で無然として待つよりも遙かにスムーズです。新聞や雑誌も全て揃えられており、探し出せないものはありませんでした。年間利用料を払う必要がありますが、その点を考慮しても納得のいく図書館であると言えます。ですから、少々家や学校から遠いのですが喜んで通っていた記憶があります。実は、コピーが思い通りに出来たことが1番この図書館に惹かれた理由ではありませんでした。結局のところ、コピー技術の発展を切に願った1年でした。

ひろせ みつしげ

(フランス語学科 4年次生)